

2021年1月10日 主の洗礼（祝）（B）

マルコによる福音書 1章7～11節

彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

緊急事態宣言が改めて発令される中、成人式の取りやめを余儀なくされたところも少なくないのではないのでしょうか。成人式を楽しみにしていた、この春新成人になる若者たちや、それを長い間養育してきた親御さんたちの失意を思うと、正直同情を禁じ得ません。ですが、今年の出来事は、そもそも成人式を何故祝うのか、大人になることとは、いったいどういうことなのかを考えてみる良い機会なのかもしれません。成人の日には、晴れ着を着て、久しぶりに同級生、同年の若者同士が集い、交流するもの悪くはないと思いますが、今年は、今どうあるべきかを考えること、あるいは育ててくれた両親や、神に感謝を表し、これからの祝福を願いながら静かに過ごすというのも、大人としての第一歩にふさわしいのではないのでしょうか。

「感謝」や「賛美」というのは、頂いた「祝福」への応答です。神が私たちに与えて下さるすべてを「祝福」として捉え、これに「賛美」と「感謝」を捧げます。そして「賛美」と「感謝」に対する応答もまた、「祝福」なのです。「わたしの誇ることは、何一つありません。すべては神からのものです。神よ、あなたは愛のお方ですから、頂くすべては善いものです。」という、全き信頼と委託を「賛美」と「感謝」によって表し、そのことを神は祝福されるのです。ちょうど天の御父と御子が、互いを受け入れ、互いを与え合うように、「賛美」・「感謝」と「祝福」の関係も成り立っています。誰が誰に向かってそれを捧げるのかによって違いがあるとしても、それが一つの行為、一つの愛の現れであることには違いはありません。

この営みは、小さな祈りにも似ています。ルカ福音書は、「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にいなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。」（ルカ6・27-28）と言い、パウロは「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。」（ロマ12・14）と言います。自分の敵や迫害する者を愛するのは、なんとも難しいことです。しかし、「祝福がありますように」と祈ることは出来ます。祝福は、自分から出てくるものではなく、「神は善い方であるから、誰をも傷つけない善い方向に軌道修正してくださる。」という信頼に立つこ

とによって神から引き出されるものだからです。また、親が子を祝福することもあります。「この子が、たくさんの恵みを受け、災いや悪から護られますように。」と祈る言葉や、心からその子の全存在を愛おしい思い、全存在を肯定する言葉もまた、「祝福」であると言えるでしょう。

さて、親が子へ祝福を与える時、親が最初にする祈りとは何でしょうか。親は子に名前を付けます。この子がどんな人になるか、どんな人生を歩むのか、多くの人々を愛し、多くの人々に愛される幸多き人生を歩んでほしい、そんな願いを込めて、親は名前を付けます。名前は、親からの最初の贈り物であり、祈りであり、祝福であると言えるでしょう。生まれた子に洗礼を授けることも、これに似ています。そこには、自分の持っている一番善いものを子に与えたいという思いや、神の祝福と護り、生きる上での信仰と希望を子どもに与えたいと思う親の愛があるのです。

聖アウグスチヌス（330-430）の頃、キリスト教では、生まれたばかりの赤ん坊に洗礼を授けてきました。幼児洗礼そのものはそれ以前からありました。「信仰は選べる年になってから」のものではありませんでした。そこには、私たち人間には、生まれた時から「原罪」があるという考えと、「すべての人は、成長の度合いや、年齢に関係なく平等であるべきである」という考え方があります。すべての人に、神の恩寵は与えられるべきなのです。

しかしながら、信仰宣言ができず、信仰が、救いが、福音が何であるかを知らない乳飲み子にすら、神の恩寵や「原罪」があるといった考えは、今の私たちにとっては発想があべこべであるように思えます。私たちの通常感覚では、生まれて間もない子どもの方が、イノセント（無垢・無罪）であり、長じて罪や悪、けがれが生じるのだと、どうしても思ってしまいます。しかし、キリスト・イエスは、“すべての”人類のために十字架でいのちを捧げられました。“すべて”という事は、時間を超越した“すべて”を指します。人間は、キリスト以前・以後に関わらず、また長幼に関係なく新たにされる必要がありました。イエスが、十字架の死と復活によって、私たちを神の子として招くため、また新しい神の子としてのご自分のいのちを私たちに与えられたことを思い返すならば、やはり洗礼は、人である“すべて”の者に与えられるべき「恵み」であり「祝福」なのです。

初代教会の時代、イエスの弟子としてイエスのすぐそばで生活を共にしていた使徒たちの頃から、洗礼は、「水」と「按手」（聖霊の注ぎ）によって捧げられてきました。復活したイエスは、弟子たちに「ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」（使 1・5）と告げられました。聖霊を受けたペトロが説教すると、三千人の人が洗礼を受け、キリスト者として加わりました。その様子は、使徒言行録にこう記されています。

ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子どもにも、遠くにいるすべての人にも、つまり、私たちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。（使 2・38-40）

洗礼の恵みは、人をすべての罪から解放し、キリスト・イエスを通して神の子とし、神とつなぐところにあります。そして堅信の恵みによって、聖霊を受け、真理を解し力強くキリストを証しする立派な一人前のキリスト者とされ、「邪悪なこの時代から救われる」のです。

使徒たちが「ヨハネの洗礼から始まって、わたしたちを離れて天に上げられた日まで」と表現したとおり、イエスの公生活はここから始まります。イエスが受けた洗礼は、私たちに与えられる洗礼の恵みの先取りともいえます。洗礼者ヨハネをして「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」と言わしめたキリストの洗礼が、今日私たちにも与えられています。

ヨルダン川で、ヨハネは「罪の悔い改めの洗礼」を授けていました。介添人に身を委ね、頭から水に沈み、罪を悔い改め清められるべく列をなした、おびただしい数の群衆は、サドカイ派、ファリサイ派の人々のみならず、兵士、徴税人、娼婦などの罪人たちでした。「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。」とあるように、その罪人の列に、「世の罪を除く神の小羊」であるイエスが並びます。贖いの死と新生の復活によって、新しい創造の先取りとして、イエス御自身もまた洗礼を望まれたのです。

すると、「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。」とありますが、イエスの上に聖霊がとどまり、その公生活を支えられたのと同じように、私たちの上にも聖霊は与えられています。イエスの洗礼がそのようなものであったが故に、私たちもまた、同じ恵みを受けることが出来るのです。「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」という言葉は、キリスト以降全てのキリスト者に実現しています。

このイエスの洗礼の時、すべてを捧げる御子に応えられる御父の応答は、今日、私たちに、あなたに、神が投げかける言葉です。それはまた、そのようにありなさいという神の祈りであり願いであり、「祝福」なのです。「すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた」。

(by, R. H. N.)



イエスが洗礼を受けたと考えられる場所は諸説あるが、その一つ「ヨルダン川対岸のベタニア」(アル・マグタス)はユネスコの世界文化遺産に登録されている。